

令和4年度 託麻南小 研究部諸計画

1 校内研修計画

(1) 基本方針

- 本校教育目標の具現化を目指す。
- 子どもを中心に据えた教育活動を目指す。
- 教職員としての資質向上を目指す。
- 教職員一人一人の創意を生かし、共通理解を図りながら、授業づくりの研究を中心に、現職研修に努める。

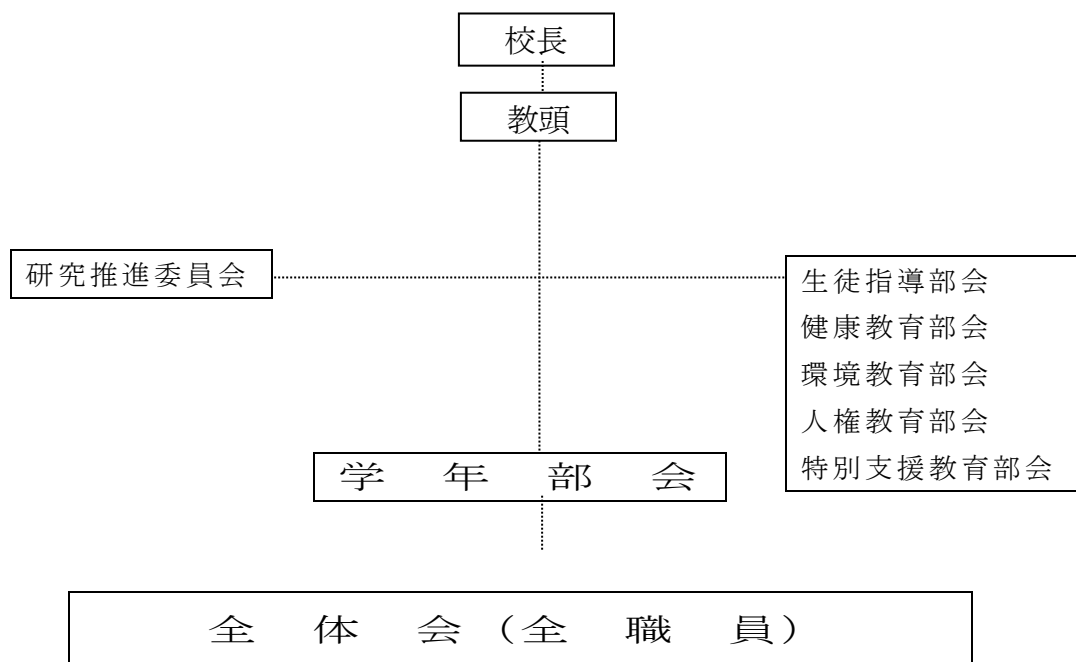
(2) 内 容

- テーマに沿った校内研究の推進
- 人権教育の充実
- 道徳教育の推進
- 各教科等経営の充実
- 現職研修の推進及び充実

(3) 組織と役割

- 研究推進委員会・・・研修全般についての計画・立案・提案・推進
校内研究運営・研究のまとめの作成
- 学年部会・・・実践と評価，研究授業（大研・中研）の参観，授業研究会の運営
- 全体会・・・・・・・共通理解と共通実践を図り，資質向上のための研修の場
研究授業・授業研究会，各種研修会・講話，各部会からの報告

(4) 組織図



2 研究主題

国語科・説明的文章における読解力の育成 ～語彙力・音読力を基盤にして～

1 主題設定の理由

(1) 現代社会の状況，学習指導要領より

今を生きる子どもたちが成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。近年においても、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や技術革新、少子高齢化などの様々な変化が挙げられ、それはこれから加速度的に進むであろう。その変化の1つが、人工知能(AI)の発達である。10～20年後には今の職業の47%は機械に変わっていくと言われている。しかし、人工知能がどれだけ進化し、思考できるようになったとしても、目的を考え、正しい判断を下すのは人間である。その際、情報を正しく読み取り活用する力、すなわち「読解力」が必要となる。またPISA 2015の調査において、読解力について、前回調査と比較して平均得点が優位に低下していることが分かった。情報化の推進に伴い、特に子どもにとって言葉を取り巻く環境が変化する中で、読解力に関して改善すべき課題が明らかになった。

以上のことから、「読解力」の向上は喫緊の課題であるといえる。

(2) 本校の実態より

昨年度の熊本市学力検査から、国語の結果について分析する。まず国語の平均正答率について、全国平均と比較して、4年が－5%、5年が－1.6%、6年が－6.4%であった。次に、「読むこと」の領域について、4年が－7.2%、5年が－1.1%、6年が－9.2%であった。さらに、「説明的な文章」の単元について、4年が－6%、5年が－2.4%、6年が－8.4%であった。特に4年と6年において全国平均を大きく下回っていることが課題である。

次に、説明的な文章における、設問別正答率について分析する。「文章の内容と合っているものを選ぶ」について、全国平均と比較して、4年が－4.1%、5年が－0.7%、6年が－5.2%であった。また、「文章についての空欄に言葉を書く」については、4年が－14.0%、5年が－5.3%、6年が－13.3%であった。文章で述べられている内容を読む力に課題がある。

以上のことから、説明文において文章を論理的に読み取ることができるようにする必要がある。そのために、基盤となる「語彙力」と「音読力」を身につけさせると共に、授業改善を行い、子どもの読解力をつける手立てを講じたい。

2 主題の捉え方

(1) 「読解力」とは

OECD(経済協力開発機構)が国際的に実施する“生徒の学習到達度調査”通称PISAは、読解力(PISA型読解力)を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義した。従来、日本で行われていた「テキストの内容を読み取る力」に加えて、「利用し、熟考する能力」が求められているのである。そこで本研究では、「読解力」を「情報を取り出し、つなぎ、自らの考えを創り出す力」と定義する。「情報を取り出す力」は、説明文において、内容を正しく理解する力である。「情報をつなげる力」は、内容や筆者の意図を解釈するために、必要な情報を見つけ、結びつける力である。「自らの考えを創り出す力」は、情報を、既有的知識や生活経験と結び付けて自分なりに表現する力である。

(2) 「語彙力」について

中央教育審議会答申（幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の 学習指導要領等の改善及び必要な方策等について H28 年 12 月 21 日）では、「特に小学校低学年において，語彙量を増やしていくということがその後の学習に大きな影響を与えると指摘されている」と提起された。学習指導要領においても，2 学年ごとに「語句の量を増やす」項目や「語句のまとまりや関係，構成や変化」の項目がある。読解力を高めていく上で，語彙力を高めていくことは必要条件と言える。

(3) 「音読力」について

市毛（1991）によると，「すらすら読めるということと読解力があることは，ほとんど同義」であることが分かっている。また荻市・川崎（2016）によると，「スラスラと読み上げるという意味での音読する力は，学力全体と大きく関わり，学力が低い子達ほど，音読する力も低い」のだという。さらに田中（1989）は「年齢が低く読む力が未熟なほど，黙読よりも音読の方が理解を促進する傾向が高い。」ことを明らかにした。以上のことから，読解力と音読力は切っても切れない関係になると言っても良い。しかし，現状を見ると，「何となく」音読の指導が行われてきたのではないか。一人一人の読解力を上げるために，視点を明確にして音読の指導に取り組む。

3 研究構想図

読解力の花を咲かせる3つのT



図1 研究構想図

4 研究の仮説と視点

(1) 目指す子ども像

情報を取り出し、つなぎ、自らの考えを創り出す子ども
語彙力・音読力が高まった子ども

(2) 研究の仮説

国語科・説明的文章の授業において、「語彙力」「音読力」の育成を基盤として、教師が、情報を取り出し、つなぎ、自らの考えを創り出す学習活動を工夫することで、子どもの読解力を高めることができるであろう。

(3) 研究の視点

【視点①】「読解力」を高める学習活動の工夫
【視点②】「語彙力」を高める工夫
【視点③】「音読力」を高める工夫

① 「読解力」を高める学習活動の工夫

説明文における「読解力」を高めるために必要な3つの力を示す。

ア 情報を取り出す力

「情報を取り出す力」は、文章の構造や内容を正しく理解する力である。これは、「学習指導要領解説国語編・思考力、判断力、表現力等C読むこと（説明文）」の「構造と内容の把握」に該当する。1・2学年において重点的に取り組むこととする。具体的な活動としては、「繰り返し出てくる言葉に○をつける活動」（1・2学年）や、「筆者の主張とその根拠をつなげる活動」（3・4学年）、「文章全体を事実と感想で分ける活動」（5・6学年）が当てはまる。その際、ペアを使って理解度を確認したり、電子黒板で当該箇所を示したりすることで、全員参加を促す工夫が考えられる。

イ 情報をつなげる力

「つなげる力」は、内容や筆者の意図を解釈するために、必要な情報を見つけ、結びつける力である。これは、「学習指導要領解説国語編・思考力、判断力、表現力等C読むこと（説明文）」の「精査・解釈」に該当する。3・4学年において重点的に取り組むこととする。具体的な活動としては、「文章中の最も大切な言葉を考える活動」（1・2学年）や、「段落を要約する活動」（3・4学年）、「説得力がある文章の工夫について考える活動」（5・6学年）が当てはまる。活動を進める中で、目的に立ち戻ることを意識することが重要である。

ウ 自らの考えを創り出す力

「自らの考えを創り出す力」は、情報を、既存の知識や生活経験と結び付けて自分なりに表現する力である。これは、「学習指導要領解説国語編・思考力、判断力、表現力等C読むこと（説明文）」の「考えの形成」に該当する。5・6学年において重点的に取り組むこととする。具体的な活動としては、「本文で取り上げられた植物と、自分が育てた植物の似ているところを書く活動」（1・2学年）や、「文章を読んで疑問に感じたところを書く活動」（3・4学年）、「筆者

の考えに賛成か反対かを自分なりに考えて発言する活動」(5・6学年)が当てはまる。既存の知識や生活経験とつなげられるよう、教科横断的な視点で指導するなどの工夫が考えられる。

② 「語彙力」を高める工夫

語彙力を高める手立てを以下に述べる。

ア 言葉による見方・考え方を働かせる

学習指導要領解説国語編によると、「言葉による見方・考え方を働かせること」について、「児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」と述べられている。子どもの語彙力を高める上で、その言葉における「イメージ」を大切にしたい。前後の文や、使われている漢字から意味を想像させたり、その言葉を使った例文を考えさせたり、動作化をさせたりする。

イ 国語辞典の活用

3年生からは国語辞典を活用して意味を調べることが習慣づける。国語に限らず、他教科でも、「分からない言葉は調べる」ことを意識させる。算数科の「伴って変わる量」での「伴う」や社会科の「殖産興業」など、一つ一つの言葉を辞書で調べることで、その学習の理解度が高まった事例がある。

ウ 「言葉の広場」の活用

国語の教科書の巻末には、「言葉の広場」という、当該学年で使ってほしい言葉が多く掲載されている。子どもが創作物を作るときにはもちろん、教師が活用して、豊かな言語環境を作ること、子どもの語彙力を高める上では重要なことである。

③ 「音読力」を高める工夫

音読力を高める手立てを以下に述べる。

ア 音読の基準を明確にする

「良い音読」と言われたときに、さまざまな視点が挙げられることが予想される。また、教師によってもその基準も曖昧であろう。そこで、「ハキハキ」「スラスラ」「正しく」という3つの基準を示す。「ハキハキ」は、ゴニョゴニョと発音せずに一音一音はっきりと音読すること、「スラスラ」は途中で止まることなく、流暢に音読すること、「正しく」は区切り(句読点)を意識して間違えないで音読することである。子どもが「良い音読」をイメージしやすいよう、個別評価する時間を作る、最初の音読と、単元末の音読を録音して比較するなどの工夫が考えられる。

イ さまざまな音読を授業に取り入れる

「良い音読」をするためには、回数をこなす必要がある。しかし、同じような音読では子どもたちの興味関心も薄れてくるであろう。「ペア読み」「グループ読み」「高速読み」「たけのこ読み」「丸読み」等、その資料にあった音読を工夫し、子どもの音読力を高めるようにする。